



「結核医療やってみいへんか」。私が研修医を終え、進路に悩みながら勤務していた卒業三年目の時のことです。大阪府は山間・離島といったへき地がありませんで、卒業生の多くは臨床を離れ、大阪府庁や保健所といった公衆衛生で活躍しています。

そのころの私は、「結核」を診療した経験はありませんでしたので、結核医療に力を注ぎたいということもなく、「病院勤務をもうちょっと続けたい」という軽い気持ちで結核医療の現場に飛び込んだのでした。

医療の谷間に灯

自治医大生なら誰でも知っているフレーズが「医療の谷間に

患者を支える難しさと痛感

灯(ひ)をともす」です。これ得として、自治医大の建学の精神・離島といった物理的なへき地だけでなく、実は医療への関

たむら よしたか
田村 嘉孝 18期生、1995年卒



病院施設の全景。最盛期にはその規模から「東洋一の結核療養所」と評された

大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター

【私の勤務地】1952年に大阪府南部の羽曳野市に開設。以後、基幹病院として大阪府の結核医療の一翼を担っている。結核医療の最盛期となる71年ごろには808床を有した結核病床も現在では150床となったが、結核感染症の専門医たちが結核医療の進歩のため日々奮闘している。

心が低下することによっても「医療の谷間」は生じます。最近では産科、小児科などで医師不足や医療の偏在化がみられるように、社会や医療者の関心が低くなると、そこに「医療の谷間」が生じます。結核医療も全国的に結核療養所の統廃合が進み、専門医が減り、へき地的な医療分野となりつつあります。その灯をともし続けるため、私に異動の命がおりたのでした。

社会復帰が励み

現在の医学では結核は治療可能な病気です。私たちの病院を訪れる多くの患者さんは、無事に治療を終えて社会復帰していきます。それを見守ることができるとは、結核医療に従事する私の励みになっています。

現在の結核医療について紹介します。慢性感染症である結核症の治療は、二〜四種類の抗菌剤を最低でも六カ月間、服用します。専門医としては有効な抗菌剤の処方が見せ場となるのですが、これは多少の経験を積みばそれほど難しくありません。むしろ長期間の服用をいかに続けてもらえるかに苦心します。たくさん薬を毎日欠かさず

服用することは簡単ではありません。治療を中断してしまう原因は患者さんによってさまざまです。仕事や人間関係、医療費用といった生活背景や経済的問題の場合もあります。そんな時は、患者さんを人として支えていくことの難しさを痛感させられます。

「(次回予定は埼玉県)